● 関　西

横原千史（よこはら せんし）

コロナ禍の影響は少しずつ改善され，オペラや合唱の活動は次第に活発になってきた。オペラで注目すべきは，**びわ湖ホール**の**《パルジファル》**。**福井敬**（パルジファル），**田崎尚美**（クンドリー），**斉木健詞**（グルネマンツ）の歌唱が素晴らしく，その名演を支える芸術監督**沼尻竜典**指揮**京都市交響楽団**の力は絶大であり，《パルジファル》終幕の「聖金曜日の音楽」のオケの美しさは格別であった。ワーグナーの楽劇でも後期作品の《神々の黄昏》や《パルジファル》のように，ライトモティーフが重層的に絡み合う複雑なテクスチャーを，沼尻と京響は緻密かつ正確に，見事な音響として聴かせてくれる。この《パルジファル》は，これまでのワーグナー上演の集大成といえるほどの見事な出来栄えであった。日生劇場との共同制作の**《セヴィリアの理髪師》**で卓越していたのは**粟國淳**の演出。大掛かりな回り舞台を巧みに使い，部屋の外と内だけでなく，中途半端な位置で止める等して，舞台空間と観客の想像力を拡げる。また男声合唱を盗賊や兵士といった歌のある個所だけでなく，歌のない所でも様々な役で登場させ，劇の奥行きを表現する。秀逸なのは，バジリオの有名なアリア「陰口はそよ風のように」で，「陰口」が擬人化され，増殖し，ついには嵐のようになってゆく様を実に楽しく描写してみせた場面だ。そのほかにもブッファの勘所をおさえた優れた着眼が随所でみられた。歌唱陣ではロジーナの**富岡明子**が最初のアリア「今の歌声は」から美声を披露し，次のフィガロとの二重唱では，華麗なコロラトゥーラを存分に聴かせた。

関西二期会《リゴレット》で最も輝いていたのはジルダの**周防彩子**。透明な声をもち，アリア「美しいお名前」で恋人への想いを見事に歌い上げた。持ち前の美声に加え，音程の正確さ，コロラトゥーラの煌めきなど魅力にあふれ，この上演の白眉となった。

関西歌劇団《偽の女庭師》は，**牧村邦彦**指揮と**井原広樹**演出でモーツァルトの魅力が存分に発揮された好演であった。歌手では**梨谷桃子**のヴィオランテが特に光っていた。**《ヘンゼルとグレーテル》**は簡略化された舞台で，ヘンゼル（**蒔田奈々穂**）とグレーテル（**松浦綾子**）は，次第に声が出るようになり，劇の中心を担うにふさわしくなっていった。歌唱陣のなかでも魔女の**堀口莉絵**が出色の出来。よく響く声で呪文を唱え，怖ろしい笑い声でヘンゼル立を震え上がらせる。**高木愛**の演出は，映像を効果的に使い，客席の通路にまで演者を立たせて，空間を広げる楽しい舞台を創り上げた

兵庫県立芸術文化センターの**《ラ・ボエーム》**は，ダンテ・フェレッティ演出の舞台が美しく，歌唱陣の水準も高く**佐渡裕**の指揮も充実していた。**みつなかオペラ**は**《コジ・ファン・トゥッテ》**を生き生きと再現。**大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス**は，珍しいハイドン**《無人島》**を取り上げた。

大阪国際フェスティバルのロッシーニの《泥棒かささぎ》は，関西初演で，ニネッタの**老田祐子**は主役を見事に歌いきった。何より透明な響きと正確なイントネーションが魅力的だ。全体をまとめた**園田隆一郎**と大阪交響楽団はブッファで特筆すべき出来。豪華なステージで，ロッシーニの珍しいセミ・オペラセリアを存分に楽しむことができた。**ザ・フェニックスホール**が主宰したグラス**《浜辺のアインシュタイン》**は，演奏会形式の抜粋版。室内楽編成で音楽監督の**中川賢一**が電子オルガンを弾きながら全体をリードする。音楽はグラス得意のミニマル・ミュージックで，同じリズムパターンを反復しながら，微妙なズレを作り，その積み重ねで多彩で多様な音色や音響を生み出す。演奏の高い技術と本質的美を追求する姿勢と上演の歴史的意義が高く評価され，文化庁芸術祭大賞を受賞した。

合唱も少しずつ演奏されるようになってきた。**神戸フロイデ合唱団**と**大阪新音フロイデ合唱団**が，ベートーヴェンの**《ミサ・ソレムニス》**を取り上げた。ともに作曲者生誕250年の2年前に予定されたもので，コロナ禍で延期されていた。神戸は**亀井正比古**指揮関西フィル，大阪は**角田鋼亮**指揮大阪フィル。コロナ禍からの再生を期待し，合唱できる歓び（フロイデ＝団の名前）をかみしめての演奏が，大きな感動を聴き手の心に刻んだ。声楽ではカウンターテナーの**中嶋俊晴**が演出付きのリーム歌曲など考え抜かれた構成のリサイタルで文化庁芸術祭新人賞を贈られた。

大阪フィルハーモニー交響楽団では，音楽監督**尾高忠明**指揮でブルックナー交響曲第５番が驚くべき名演であり，CDでも確認できる。またドビュッシー，ラヴェル，イベールなどのフランスもの連続演奏会でもセンスの良さが光った。客演では，デュトワの《ペトルーシュカ》とタバシュニクの《詩篇交響曲》が特に優れた演奏であった。**日本センチュリー交響楽団**は，首席指揮者**飯森範親**によるブルックナー交響曲第１番とハイドン・マラソン，首席客演指揮者**久石譲**によるシューマン交響曲第１番とスメラ交響曲が優れた演奏で印象に残った。**関西フィルハーモニー管弦楽団**は，常任指揮者**藤岡幸夫**のシューベルトミサ第６番と貴志康一《仏陀交響曲》，伊福部昭ヴァイオリン協奏曲（**神尾真由子**独奏）が特筆すべき名演といえる。桂冠指揮者**飯守泰次郎**のブルックナー交響曲第00番と第０番も立派な演奏だった。**大阪交響楽団**では，桂冠指揮者**外山雄三**によるシューベルト《グレート》が巨匠の至芸というべき感動的な演奏だ。常任指揮者**山下一史**就任演奏会では，シュトラウス《最後の4つの歌》（**石橋栄実**独唱）が印象的。首席客演指揮者**高橋直史**就任演奏会ではシェーンベルク歌曲（**並河寿美**独唱）が豊かな音色と緻密な構成で聴衆を魅了した。**大阪国際フェスティバル**の大阪４オケは例年通りの充実ぶり。むしろ驚嘆されたのは**いずみホール**が企画した**山田和樹**指揮４オケによるシューベルト交響曲チクルス。それぞれのオケの特性を生かした名演揃いであった。

京都市交響楽団は首席客演指揮者**アクセルロッド**のマーラー交響曲第２番《復活》で，冷静沈着ながら驚くべき演奏に深く感嘆させられた。**兵庫県立芸術文化センター管弦楽団**では，音楽監督**佐渡裕**のマーラー交響曲第４番が情熱的な快演。

いずみシンフォニエッタ大阪は**飯森範親**指揮で難曲のクセナキスに挑戦した。**神戸市室内管弦楽団**は，音楽監督に**鈴木秀美**指揮で《ジュピター》《運命》の名演にピリオド思想の完成形をみた思いがした。**アンサンブル神戸**は**矢野正浩**指揮による三枝成彰のピアノ協奏曲（辻井伸行独奏）を取り上げた。

室内楽では，アルティ四重奏団，クァルテット・エクセルシオ，澤弦楽四重奏団，日下紗矢子，木嶋真優など。ピアニストでは，河村尚子，小菅優，萩原麻未，上原彩子，有馬みどり，松本昌敏，青井彰，中野慶理，多川響子，加藤英雄などの演奏が印象に残った。